



## 【陸前高田学校訪問—早まる統廃合と大きな人事異動—】

3月23日は、陸前高田の支援先である8校の学校訪問を行いました。この日は、教員の人事異動が発表され、多くの学校で離任式が行われていました。昨年4月、岩手県は被災した地域に配慮し沿岸部を中心に人事異動の凍結を行いました。その結果、被災した学校には多くの教師たちが留まり、被災した子どもたちとともに1年間を過ごすことになりました。しかし、今年4月は、その反動のためか、大きな人事異動となったようで、特に目立ったのは市内14校の内11校の副校長が異動となっていることでした。

特に落胆の表情を隠せなかったのが、被災学校でありながら、校長・副校長・教務主任の3人が異動することとなり、かつ、校長は市内の別の学校の校長となる学校でした。この学校は、2012年度末、近隣3校との統廃合が決まったとのことで、「学校の閉校の最後の年でありながら、管理職が全部変わって…、保護者からも『先生、何だよ！』って言われて…、『自分が決められることじゃないから…』って言うてるんだけど、『自分もこの形だけはやめてくれ』って頼んでいたんだけどね、統廃合の時には、校長職が継続されないといけないようで、そう考えるとこれしかないのかも…」と、受け入れ難い人事異動を自ら受け入れる「納得」の根拠を探すような会話が、私たちとの間に交わされました。

このような会話は、別の小学校の副校長との間にもありました。被災したこの小学校では近隣の小学校との統廃合が、この震災を受けて決まったとのことで、「きっと、もっと先には統廃合ということがあったとは思いますが、震災で早まったという感じね」と話し、「私も後1年で閉校になってしまうこの学校の最後を見届けたいと思うのだけど、教員生活が残り3年しかない私よりは、別の若い人の方がいいという判断なんでしょう」と話され、ここにも受け入れ難い人事異動を、自ら引き受ける「納得」の根拠を探す営みを感じられました。

被災地が／被災当事者が、被災を乗り越えるためには、自らのおかれた環境が、それ以前より少しでもよくなるのが最低条件だと、被災地に通いながら思ってきました。しかしながら、進行しているのは、「頑張れ、東北」というかけ声の裏側で、被災当事者が「仕方ない」といつてあきらめていくところ、そこを落とすどころとして、被災地の「納得」をとりつけるような事態ではないかということ強く感じた訪問でした。

## 【ライオン学校のお別れ会】

震災から1年が過ぎ、春まだ浅き3月25日に、ライオン学校は閉校しました。お別れをどのように受け止めるのか、スタッフも子どもたちも心が揺れ動きます。

3月19日、お別れ会に向けての緊急スタッフミーティングを開催しました。そこで打ち合わされたことは、「震災からこの1年を振り返って、今までタブーのようになって私たちも聞いてこなかったこと、子どもたちも話してこなかったことを、ちょっとでもことばにしておこう」が一番のポイントでした。富士山修学旅行以後、ずっと続けて

きた「振り返り」。子どもと大人が1対1でその日の出来事や、時には学校や家庭での様子を振り返ってきたのは、実はこのときのためであったと言っても過言ではありません。お別れする前に、可能な限り、津波とその後の生活を見つめてことばにして欲しい。しっかりと体験を整理整頓していく積み重ねが、彼ら／彼女らが大人になったとき、震災と正面から向き合える力を持つことになると思います。そのために、私たちは子どもたちの横に寄り添ってきたのです。

時間をかけ、慌てることなく、子どもたちの中に「ことばにする力」が充填されるのを待ってきました。「本当に大事な話」の聞き手として、信頼される大人でありたいと願ってきました。体験をことばに整理する触媒の働きが、私達にできる支援のめざすところだったのですから。

お別れ会前日は、係分担をして準備に取りかかりました。以前「市川富美男一座」をお招きしたイベントを経験しているだけに、司会、買い物、看板づくり、プログラム掲示、装飾、ゲーム担当・・・それらの仕事を実にききとこなしていきます。午前中だけではなく、午後にかかってしまうかな、と思っていた準備は、見事に午前中で終了。「外で遊んでいい？」と早速のおねだりです。

午後はいよいよ「1年間の振り返り」。作文にして、お別れ会で発表する予定です。ライオン学校の校長がみんなに「1年間の振り返り」の意味を話します。静かにみんなが聞く中で、どうしても三人の男の子が集中できません。「まじめに話をする人には、まじめな態度で答えなければならぬ」ことをみんなの前で伝えます。そうして始まった振り返り。大人と真剣に話す子ども、なんといいかわからず下を向いてしまう子ども、核心を避けるように早く終わらせようとする子ども。それでも、たっぷりの時間を使って、それぞれが「1年間の振り返り」に取り組むことができました。

夜、スタッフミーティングは遅くまでかかりました。子ども一人ひとりが何を語ったのかが報告されました。

「震災後、いじめや暴力がクラスでは増えて、自分もいじめられるようになった。」  
「お母さんが親戚を探していて、被災した家の屋根裏から発見したとき、ひどいショックを受けていた」

「津波で流されていく死体を見てしまった。誰にも言えないし、思い出すのもこわい。」  
「家庭の中心であったおじいちゃんが津波でなくなってから、家族はばらばらになった感じだし、家の中も整理できずぐちゃぐちゃになっている。」

こんなにまとまったことばではないけれど、やっと子どもたちはたどたどしく語り始めたようです。特に、話を落ち着いて聞けなかった三人の男の子は、思い出したくない、つらい経験を引きずっていました。

「作文にして発表するのはいいや」という子どもの気持ちを大事にして、当日用の作文



を朝にまとめることにしました。

お別れ会は順調に、そして楽しく進みました。どこかしつとりとしたムードで、子どもたちは落ち着いていました。ゲームも遊びも、照れながらの作文発表も上手にできました。うまく文章にまとめることができない2年生の男の子は、ライオン学校に出会ったときから今までを、小さな絵本にして持ってきてくれました。スタッフからは子どもたちに、アルバムと宛先がかかれた往復はがきをプレゼントしました。そして、「つらかったら、がんばっちゃダメだよ。往復はがきに、すぐ来い！と書いて送って欲しい。かならず来るから。」そんな約束をしました。



そしてその日私達スタッフは、多くの母親の涙に出会ったのです。子どもたちが外遊びをしている時間に、参加して下さった母親一人ひとりと懇談の時間を持ちました。顔はお互い知っていても、ゆっくりと話をすることのなかったお母さんたち。私達に対する感謝のことばの裏に見たのは、被災後の生活の変化に必死に耐える親の姿でした。家の収入のこと、子どもたちの教育のこと、日々の生活の切り盛り・・・誰もが必死で生活するしかない状況では、愚痴を言う相手もいず、ちょっとしたことでも助けてくれる者もいない。すべてを背負うしかないつらい状況に、髪の毛が抜けてしまったお母さんもいました。家庭まで行って父親と話をしてきた大学生スタッフは、父親がかかえているつらい状況に、涙を流しながらもどってきました。「また来てください。」という母親のことばに、私たちは「今度はお母さんたちに会いに来ます。」と答えていました。

富士山修学旅行の時に命名した「ライオン学校」は、訪れたサファリパークにちなんでつけたものでした。よほど後になって、万石浦から見える近くの山が「ライオン山」と呼ばれていることを6年生の女の子が教えてくれました。ライオン学校が終わっても、今度はライオン山が、あの子たちを見守ってくれることを信じています。



\*\*\*\*\*

お別れ会の前日の準備の日、インフルエンザ完治の大事をとって休んだ小学校3年生の男の子が、震災から1年を振り返る作文を、お母さんと一緒に書いてくれました。お母さんが、子どもさんに、その時々様子を丁寧に聞き取っていることがうかがえる作文です。

\*\*\*\*\*

新しい年を迎え、1年間の目標をたて毎日が楽しい日々を過ごしていた。あの時までは…。奴は、突然やって来たのだ…突然に。違う、突然なんかじゃなかったのかもしれない、2日前の「3月9日」にも、大きな地震が発生している。それは、近い内に「次があるからなあ」と言う、ぼく達への警告だったんだと今になって思う。それを、ただの大きな地震で終わらせてしまった。

あの日から1年。早かったのか、長かったのか、あの時のぼくは、学校の下校途中で、ソロバンへ行く為、急いで帰ろうと信号の前で友達と別れた瞬間、地面が鳴り「地震だ」友達のお母さんに、「早く、こっちに渡って来て！早く」と言われたが、「大丈夫です。走って帰るので」と言って家に向かって走り出そうとしたが、今まで経験した事のない、すごく大きな揺れに、ぼくは立つことも出来ずにいた。地面が鳴っているのか、空がうなっているのか解らない音が鳴りながら、揺れは大きく激し

くなっていく中、家に帰ろうと気持ちがあっても足が動かない、どうしたらいいのかとと思っているほどの近くに偶然にも、警察官（警備員）がいて、ぼくの手を握り、揺れがおさまるまで自分の体の中に、ぼくを包み込んでいてくれて、「大丈夫だから、もう少しで止まるから、しっかりとしゃがんで…」と、ずっと声をかけていてくれて、揺れがおさまったのと同時に、そのまま、すぐ近くの万石浦中学校体育館へ連れていかれた。その間、ずっと手を握っていてくれた。1年経った今でも、その大きくて強い力でギュッと握られた事は忘れる事はない。

体育館には、地域の人や友達、その家族と沢山の人が着の身着のまま避難して来ていた。ぼくは、自分の家族を探した。大きな声で、一人一人の顔を確認しながら。ぼくには、1月に生まれたばかりの弟がいる。だが、そこにはぼくの家族の姿は一人もなかった。外は静かで雪がしんしん降ってきた。一晩中、一人で中学校で過ごした。ビスケット1枚だけの食事、服のままの寝起き、家族はいないが、友達がいたので、寂しい気持ちはなかった。

2日目の朝、お父さんが来た。すごく、すごく嬉しかった。離したくなかった。離れたら、また、一人になるんじゃないかと思っていました。ぼくとお父さんは、すぐにお母さんと弟、一緒にいるだろうおじいさんを探した。万石浦中学校、万石浦小学校、自宅、水産高校と探したけれど、どこにもいない。もう周りは冠水状態で、プールみたいになっていて、普通の道路はないように見えた。どこを探せばいいのか解らなくなり、お父さんの実家の人が避難している渡波小学校に行くことにした。

お父さんは、家の人達に、「お母さんと弟とおじいさん、どこを探してもいない。もしかすると…」と言っていた。もしかすると意味がわからずに、ぼくは、いとこ達とトランプをしたり、久しぶりのパンを食べた。

お母さんと弟、おじいちゃん与会ったのは、その日の夕方。ぼく達が中学校を出て、自宅ー水産高校へ、お母さん達が水産高校ー自宅ー中学校へと行き違いになっていた。ぼくと、お母さん、弟は、それから3、4週間の間、おばあちゃんのお姉さんの家にお世話になり、その後は、万石浦中学校体育館に避難しました。（後半は、報告書に掲載します）

## 【支援隊活動記録 3月9日～3月25日】

### ■陸前高田 学校支援支援

○3月22～23日（第38回）：学校訪問（報告書文書受取・報告書配付予告）、現地スタッフ支払、「まつ」佐々木先生との打ち合わせ、現地業者（山十・三上教材）支払  
□支援隊メンバー：家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水睦美（東京理科大学）

### ■石巻市万石浦子ども支援

○3月24～25日（第22回）万石浦ライオン学校のお別れ会  
□支援隊メンバー：柿本隆夫（引地台中学校）、松永雅文（大和市特別支援教室）、家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水睦美（東京理科大学）、福島良彦・小沼慶多・高柳恭介・勝田新・宮沢葵（引地台中学校）、下新原なつみ・内藤順子（大野原小学校）、今井美里・甘利悠貴・大林沙紀・古浦新司（東京理科大学学生）、村田仁美（和光大学学生）、保坂克洋（立教大学院生）

次年度も形を変えつつ継続的な支援を行いますので、寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（Edベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン）

**NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー**

〒242-0007 大和中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

